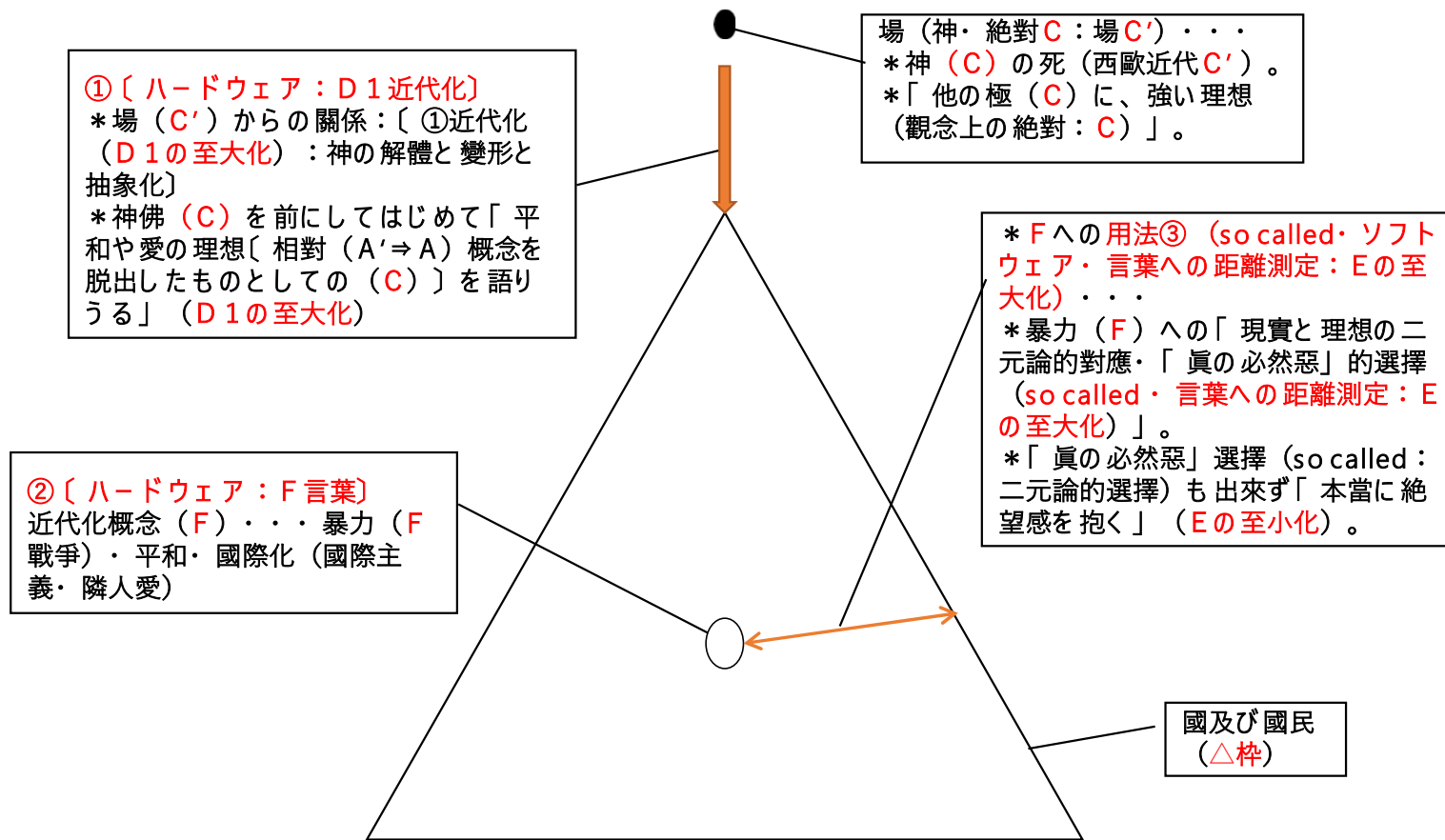


〔近代化、即ち「神（C）に型どれる人間の概念の探究」について〕

*「萬人をその胸に救ひとる人格神が、その手をその脚を、さらにその胴體をもぎとられ、それらが制度化せられ機械化（A）せられる——で、神は人體を失つて、完全な精神としての抽象化を受ける。その精神が文學の領域（B）として残されるといふわけだ」。

*「近代ヨーロッパは神を見失つた——が、それはただ神の解體と變形と抽象化とを意味するに過ぎぬ。まさにそのための手続きであり過程にすぎなかつたヨーロッパの近代精神とその政治制度・經濟機構（A）」。（『近代の宿命』全二P463・P466）

關係論：*神（C）の死（西歐近代C'）⇒からの關係〔①近代化（D1の至大化：神の解體と變形と抽象化）〕⇒「②ヒューマニズム・民主主義・個人主義等」（①的概念F⇒②への用法③（言葉への距離測定・so called・ソフトウェア・精神の政治學：Eの至大化）⇒國及び國民（△粹）：①への適應正常。



《神佛（觀念上の絶對：C）と「絶望感」（第一段階）・「行動」（第二段階）との關係》

〔第一段階〕「絶望感こそ好機」⇒「左圖参照。

關係論：神佛（觀念上の絶對：C）⇒からの關係：神佛を前にしてはじめて「①：平和や愛の理想〔相對概念を脱出したものとしての（C）〕を語りうる」（D1の至大化）⇒とは即ち「②：國際間（F）の緊張（暴力：①的對立概念F）⇒E：②に妥協し「眞の必然惡」選擇（so called：二元論的選擇）も出來ず「③：本當に絶望感〔即ち『物質で解決できぬ精神の悩み』〕をいだいた（Eの至小化）なら、むしろ、それこそ好機。その絶望感を乗り越えてこそ（Eの至大化）、なに（物：場C）が必要か（以下「第二段階」）を學びとる」（②への距離獲得：Eの至大化）⇒弱者（少數派：△粹）：①への適應正常。

〔第二段階〕「行動に論理の筋を通す」（前段P245内容）⇒PP圖参照『少數派と多數派』。